

---

# 一般人未満勇者以下

ハウレン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一般人未満勇者以下

### 【Nコード】

N4272I

### 【作者名】

ホウレン

### 【あらすじ】

昔の偉い人が言っていた。「過ぎたるは及ばざるが如し」と……。きっとその言葉を思いついた人は、異世界人だったに違いない。ただの大学生に異世界は荷が重い。そんな話。

## 序話

三百六十度を地平線に囲まれた、どこまでも広い草原。

はるか遠くに望む山脈や森の影の他には、大地を覆いつくし風に揺れる柔らかな草花と高く透き通った大空のみがこの場所にある全てだった。……だが、そんなピクニックに最適な場所も、今回はかりは酷く物々しい雰囲気にも包まれている。

硬い金属に包まれた数え切れないほどの軍靴が行進し、だというのにたった一对の足しかないように一つの足音を踏み鳴らす。圧倒的に洗練された幾千幾万もの足並みは、ただの一瞬もリズムを崩さず。

土煙をあげ、陽光を反し鈍色に光る鎧を纏った一万八千の軍勢が、草原のほぼ中央に集結した。

「止まれ」

先頭を歩く、一人豪華な鎧を纏う兵士が小さくつぶやき、左手を上げる。その瞬間、全ての音がやんだ。

同時に、草原の彼方が陽炎のようにゆがみ、足の裏に感じる地面が振動を始める。

魔物の軍勢が、ついに稜線を越えてきたのだ。

「よつやく、このときが来ましたわね」

ふと、場違いなソプラノの声が響いた。

「はっ、接敵までおよそ半刻ほどかと思われませう」

豪華な鎧の兵士が恭しく敬礼をする先、景色がまるで絵の具を掻き混ぜるかのようになむ。そして、ぐにやりと混ざった景色に水面の波紋を思わせる揺らぎが現れ、そこからゆっくりと真紅のロングドレスに身を包んだ少女が現れた。

年のころは十七、八といったところだろうか。緩くウェーブのかった、太陽の光をつむぎだしたような金の髪に、壮麗さを伺わせる鋭いながらも大きな青い瞳。たとえ彼女を知らない人間がここにいたとして、その神秘的で神聖な雰囲気とドレスに施された金銀様々な刺繍からも、その少女がかなり高い地位にいることと予想できるだろう。

それも当然だ。彼女は、この兵士たちの所属する国の王女なのだから。

「彼女らの数は？」

王女の声は凜々しく、まるで森の木々を抜ける風のように響き渡る。

「目算で五万から七万との報告が入っております」

「こちらの数倍ね。……歴史上、これだけの大差を覆した戦いなどあったかしら？」

「いえ、自分の記憶している限りでは」

王女の赤いルージュを引いた薄い唇が、にやりと持ち上がった。そして、兵士たちを振り向くと、その細いながらのすべてを包む込

むような両腕を開いて。

「なれば、わたくしたちは歴史書に名を残すことになりますわね。大いなる魔法を用いて、巨大なる魔に勝利した、偉大なる者たちとして！」

瞬間、大気を揺るがす鬨の声があがった。すべての兵士が剣を抜き、天に掲げる。

「さあ、行きますわよ！」

王女が腕を振り上げる。

同時に、彼女の体から白い光があがった。足元に円形の幾何学模様が光で描かれ、回転を繰り返して広がっていく。

限りない数の光の線が地を走り、次々と複雑な模様を形作っていく。

風が王女を包むように吹きすさび、目に見えない何か歓喜の声を上げた。

「目に物見せて差し上げますわ、薄汚い魔物ども！」

地平線の向こうには、すでに黒い何か蠢いていることが見て取れる。

魔物の群れだ。

得体の知れない、人間の感性では到底理解できないような造形の異形たち。

本来ならば、ただの一体でさえ数人がかりで退治しなければならぬような強さを持っているやつらが、ほんの目と鼻の先に数万という単位でこちらへ向かってくる。それは、普通の人間ならばその事実だけでショック死しかねないほどのことだが、今ここにいる兵

士たちの心には大きな希望がわきあがっていた。

「ぐ……ああっ！」

体中のありつたけの魔力を、足元に広がる魔法陣に流し込む。

王家に伝わる、空間に干渉する大魔法。それは、王の血を引き常人よりも遥かに大きな魔力を持った王女でさえも、身を引き裂かれるような痛みを耐えて魔力を搾り出さなければ発動さえまならない。

ビリビリと、体中の何もかもが吸い取られていくような感覚。

神経を集中し、何年もかけて修得した術式をくみ上げていく。

そして

「完成……しましたわっ！」

最後の線がつながったその瞬間、魔法陣から天にも届くような光が立ち上った。

まるで神が降り立ってくるかのような膨大の光の中、王女は笑った。大きく、魔物たちにも届くほどに。

「このときを、この一瞬を、夢にまで見ましたわ！ わたくしの人をかけた大魔法！」

勇者召喚陣。

同時に爆発したかのように溢れ出した光は津波のように、瞬く間に草原を覆いつくした。

秋の夜長、部屋でカーペットの上に寝転がってテレビをBGMに小説を読む。それが、山瀬直太郎やませなおたろうのここ最近の過ごし方だった。

暑くもなく寒くもない、春に次ぐ良い季節。もっとも、春以上に寒暖の差が激しく、あと一、二週間もすれば暖房が欲しくなってくるのだろっが。花は散るからこそ美しいというか、セミの最後の一週間というか、そういったごく短い時間でしか味わえない至福がやけに心地いい。

テレビの雑音が小説への集中を妨げ、なかなか頭に小説の内容が入ってこないが、そんな無駄だと思える時間を浪費することがなんとなく楽しかった。

要するに、彼は少し変人だ。

この無為に間延びした時間を過ごすために、秋の京都に旅行に行こうという風情ある大学の友人の誘いを断っているのだから尚更だろっ。もっとも、その友人も彼のそんな妙な性格を知っているのか、なんとなくそう言う気がしてた、などといった笑っていたのだから、類友、というやつなのかもしれないが。

「あー……眠い」

一時間ほど寝転がって凝った背筋を伸ばしながら、直太郎は読みかけの本にしおりを挟んだ。表紙に際どい衣装を纏った女の子の絵が少し痛々しい、いわゆるライトノベルというやつだ。

彼は様々な本を読む。ファンタジーやミステリーに始まって、スペインスや海外の古典SF、純文学に論文から哲学まで。そして最近微妙にはまっているのが、彼の友人が好んで読んでいたライトノベルだ。

確かに、文章力という点では、物にもよるが物足りないところはあるかもしれないし、何でそうなるんだという展開や、理解しづらい妙に複雑な設定など、直太郎の今まで読んできたいろいろとかけ離れた内容だ。

だが、彼はその中に夢を感じた。

こうだったらいいな、ああだったらいいなという、子供のころに憧れた気持ちだが、大人になるまで熟成されて形になったもの。そんな懐かしい何かが、妙に気に入ったのだった。

「異世界とかいけたらなー、さぞ楽しいんだろうな」

いま直太郎が読んでいたのは、一介の高校生が、何かの弾みで異世界に行ってしまったってどうのこうの、という物語だ。

剣や魔法が当たり前のよう存在して、怪物がいて、神秘的なドラゴンが喋りかけてきて、そして主人公は己の中にある不思議な力を使って世界を救っていく。

誰もが一度は夢見たような物語。

そんな世界、きつと楽しいに違いない。

サンタクローヌは空を飛ばないと知っていても、いて欲しいと思うのが人間。ないものこそ欲しくなる。当たり前にあるようなものの価値に気づかずに、手を伸ばして夜空の星をつかみたいと願う。

「……ま、どうでもいいか」

もう夜も遅い。

直太郎は立ち上がって、風呂にでも入ろうかとダンス代わりの力

ラーボックスから服を出そうとして……。

「ん？」

机の上の携帯電話が、流行りのJポップを奏でた。手にとって見れば、ディスプレイに表示されたのは旅行中の友人の名前だ。

通話ボタンを押し、携帯を耳に当てる。

「よお、どうかしたか？」

『いやいや、山瀬が一人で寂しい思いしてるんじゃないかと思ってね』

そう言う友人の声に混じって聞こえてくる、聞き覚えのある喧騒。時間的に、おそらく宴会か何かの最中なのだろう。そういえば、友人の声にも少しばかり酔っているときのそれを感じた。

「んなこといって、自慢したいだけだろうが」

『そんなことないっての、土産代わりに楽しさをお裾分けー』

「いやそんなのいらんから、ちゃんと土産は買ってこいよ。食べ物とか食い物とか」

『分かってんよー、ちゃんと今朝に生八橋とか買っといいたから。超新鮮』

「四泊の最初にそんなもん買うなよ……」

『あはははー、冗談冗談。嘘をつかないことインディアンの如し、しっかり買ってくから心配すんなー』

それからおよそ二十分の間、友人は酔っ払いのテンションのまま喋り続け、直太郎はそれを鬱陶しく思いながらも辛抱強く聞き続けていた。

時計の針はゆっくりながらも確実に進み、時刻はもうあと数分で

零時を回る。

「おい、そろそろ十二時回るから切るぞ。もう結構眠い」

そのとき、僅かに足元が振動しているのを感じた。

「ん？ どした？」

地震とはどこか違う、小刻みな揺れ。どこかで道路工事でもしているかと一瞬思ったが、いまは夜中の零時だ。

揺れは続き、収まる気配はない。

それどころか、だんだんと揺れはその大きさを増していつているように感じた。

「おい、なんかあったのか？」

電話口から聞こえてくる声に、直太郎は我に返る。

「あ、ああ、いや、さっきから何かおかしいんだよ」

そう言っている間にも、揺れはさらに大きくなる。

そろそろ、まともに立ち上がれないかもしれない。

しかしそこで、直太郎はおかしなことに気づいた。揺れは大きくなるし、もう震度で言えば四や五と言っていいくらいだが……部屋の中のものは、何一つその場所を移動していないのだ。まるで、自分自身だけが揺れているように。

一瞬、疑ったのは、何かの病気が。それとも、子供のころにブラコンコから落ちたときに打った頭が、いまさらながらにおかしくなったのか。

そんなことを考えている間に、ピタリと、揺れが止まった。それ

こそ、まるで何もなかったかのように。

『大丈夫か？』

「ああ、たぶんもうだいじょ

」

光。

目の前から見慣れた部屋の景色が一瞬にして消え去り、白に塗り潰された。

かつて戦争物の映画で見た、スタングレナードを思い出す。

そしてまた一瞬で、光は消える。

カシャン、と軽い何かが落ちる音がした。

『え、お、おいつ、どうしたっ？ 直、直なおっ！』

落ちたのは、直太郎が手にしていた携帯電話。だがしかし、電話口で友人が声を上げて、それを直太郎が拾い上げることはなかった。

部屋に残ったのは、携帯のディスプレイに映った、橘美穂たちばなみほという名前。

それだけが、寂しく光っていた

一話（前書き）

ぬあー、小説って難しい……。

## 一話

目の前に、女が立っていた。

赤いドレスを身に纏い、長く美しい金の髪。こちらを見る釣りあがった目は意志の強さを感じさせる凛々しさで。

元来、周りの友人たちのようにアイドルの写真でわいわいと盛り上がれないほどには女性に興味のなかつた直太郎だが、目の前の女は彼の目から見ても十分に絶世と言えるほどの美しさだと思えた。

だが、今のところそんなことはどうでもいい。

女の現実離れた容姿に目を奪われること一瞬、ふと我に返るとあたりを見渡す。

「どこだ、ここは……？」

「あら、言葉が通じますのね」

ふと呟いた言葉に、ドレスの女は嬉しさの混じった声で答えた。

「さすがは我が王国に伝わる秘術。異世界からの召喚ということですから言葉が通ずるのかどうか、少し不安でしたが……」

そこは、見渡す限りの鎧の群れと、平らな草原。そして遠くに見える山脈や森に囲まれた、鎧さえなければあまりに爽やかな景色だった。

これが夢ではないのなら、日本ではない。日本にこんな場所はない。りえない。

ならば海外かと言われれば、日本語がしっかりと通じたわけで……そもそも、何で鎧の軍団がいるんだという話になる。

……頬に当たる風は本物。足の裏を突く草の感触も、なにやら子供時代を思い出して懐かしい。

夢と気づいていない夢なのか……それとも現実……。

「わたくしの名は、アルタラ・ミレ・ガルナ。ここガルナ王国の王女ですわ。差し支えなければ、あなたのお名前を教えてくださいませんか」

「ガルナ王国……？」

この非現実じみた情景からすれば、聞いたことのない国名が出てきても半ば予想通りではあった。

しかし、それはそれで疑問は浮かぶ。

ならば、ここはどこなのだ。

そのとき、直太郎の頭に浮かんできたのは、さっきまで読んでいた小説の表紙だった。

「異世界……」

そういえば、ドレスの女が呟いた言葉の中にも、そんな単語が聞き取れた。

しかし、まさか本当に……。

「あの、聞いておりますの？」

「え？」

鋭い視線が、直太郎の目を覗き込んでいた。

思考の渦から引き摺り上げられ、そういえば名前を聞かされていたな、となんだか他人事のように思い出す。

「俺の名前は……」

女の名前からすれば、直太郎の名前はここだと異常なのではない

か。などと一瞬頭によぎり、直太郎は素直に答えることを躊躇ったが、結局、そのまま答えることにした。偽名を使っても仕方ないし、意味がない。

「山瀬直太郎だ」

「ヤマセ、ナオタロウ様ですわね」

「ああ、そうだ。……えーとな、それで、あー……」

「アルタラ、ですわ。アルで結構です」

「……アルタラさん、ここはどこだ？ 俺は何でこんなところに？」

「ここはどこ、と言われれば、先ほど言いましたとおりガルナ王国の領内ですわ。正確には、”巨人の寝床”と呼ばれる世界有数の広さを誇る平原ですわね。そして、なぜここに、という問いの答えは……」

アルタラはそこで言葉を切り、指で、直太郎から見て左の方向を指し、

「あれを、あなた様に駆逐していただくためですわ、わたくしの勇者様」

最後にハートマークでもつきそうな笑顔で、そう言った。

「……は？」

直太郎が、アルタラの指差すほうへ目を凝らせば、地平線を埋めつく黒い影。

そういえば混乱していたために気づかなかったが、地面が絶えず鳴動しているように感じる。

「彼奴らは魔物と呼ばれる、魔王の尖兵。人であれ物であれ、すべ

てを食らい尽くそうとする悪魔ですわ」

……魔物に魔王、なんというレトロゲーム。

「あの影が、全部魔物つてやつなのか？」

「ええ、そうですね。偵察の言によれば、その数は五万から七万…

…対してこちらの兵は一万八千」

「完全に劣勢じゃないか」

「まともに戦えば、一刻ともたずに壊滅しますわね」

こともなげに、アルタラは頷いた。

「それを、俺にどうにかしろって言うのか」

「その通りですわ」

あまりの展開に、直太郎は大きく溜息をついた。

「ふざけんな、意味が分からん。こっちはただの大学生だぞ？ そ  
ちの兵士一人にだって勝てる気がしない」

「あら、過ぎた謙遜は嫌味ですわよ？ 勇者様の中にある途方もな  
く強大な魔力。それさえあれば、あの程度の数を殲滅することなど  
容易いではなくて？」

魔力とは、またありきたりな単語だ。

その魔力があるというならば、直太郎には魔法が使える、という  
ことなのだろうか。

それはさすがに信じられない。ついさっきまで魔法にあこがれる  
側の人間だったのだ、信じられるわけがなかった。

「アルタラ様つ、魔物が……っ！」

「分かっていますわ！ ……さあ、勇者様。お急ぎになってくださいまし、早くしなければ彼奴らの攻撃が……くっ！」

何かに反応したようにアルタラが腕を上げた瞬間、何かが弾けるような音と同時に光が走る。

見れば、黒い影たちの方向から幾筋もの雷の線が迸っていた。

それらは一瞬で空を奔るが、アルタラの目の前で何かにぶつかったように四散する。

「な……っ！」

「勇者様！ 早く、そのお力を」

「うああっ！」

アルタラの言葉が終わる前に、直太郎の後ろで何かが爆発する。咄嗟に振り向けば、目に入ったのは立ち昇る黒煙と、クレーターのよつに抉られた地面。

そして、

「あ……あ……」

砕けた鎧、流れる血。

苦しそつに喘ぐ声。

そして、人の焼ける匂い。

「ひっ……っ！」

日本という平和な国に暮らしていた直太郎にとって、あまりの惨状。

直太郎は思わず後ろに倒れこんだ。

「くそつ、アルタラ様！」

「全軍、剣を抜け！ 迎撃準備！ 勇者様つ、何をなさってますの！ そんなところに座っている場合ではありませんわ！」

もはや、そこは直太郎の憧れていたような情景ではなかった。

遠くから、次々と飛来する魔法。

それは火に雷、氷や水。

それを食らい、次々と倒れる兵士たち。

後方に布陣する弓兵たちが矢を放つが、そもそもの絶対数が違いすぎる上に、相手側に魔法を使える固体が多すぎる。そのせいで、剣士はなかなか近づくことができずに、ただ数を減らしていく。

それはさながら、地獄のようだった。

手足が吹き飛び、腹を貫かれ倒れる兵士たち。

そこかしこから上がる悲鳴、そして断末魔の叫び。

アルタラが見えない壁のようなもので防御はしてるのだが、一人で防ぐにはあまりに範囲が広すぎる。

「なんだ……なんなんだよこれは……っ！」

目の前でたくさん人間が、いとも簡単に死んでいく。

何も考えられない。

ありえないほどの恐怖から、涙が流れる。

血の気が引き、体中が震えだす。

歯はカチカチと音を鳴らし、息ができない。

「勇者様っ！」

悲痛な声で、アルタラが叫んだ。

「ゆっしゅ……っ？」

その瞬間、直太郎の中で何かが爆発した。

「な、なんなんだよお前さっきから！ 勇者勇者わけわかんねえこ  
と言いやがって、お前が俺をこんなところに連れてきたのか！ ふざ  
けんな！ 俺を、俺を帰してくれっ、元の場所につ、早く！」

もはや理性も何もない、混乱の極みで直太郎は喚いた。年甲斐も  
なく、涙と鼻水で顔はぐしゃぐしゃだ。

「こんな、こんなっ……！」

そして、直太郎がさらに言葉が続けようと、立ち上がるために地  
面に手をついた瞬間、

「うわっ！」

身体が大きく横に吹き飛んだ。

「な、何を遊んでおられるのですか！」

「い、いや、違っ……うあ！」

今度は反対側に、数メートル吹き飛んで地面に落ちた。  
別に魔法を食らったわけではない。それなのに、直太郎は立ち上  
がろうとする度に何度も地面を転がった。

「勇者様……？」

「な、なんだこれ……俺の力が、強くなってるのか……？」

試しに、思いっきり力を抜いてゆっくりと慎重に立ち上がろうと

試みれば、ふらふらと不安定になりながらもなんとか立ち上がることができた。

「お、お前、俺に何をしたっ……ぐ！」

アルタラに詰め寄ろうとして、直太郎はまた数メートル吹き飛んだ。

まるで地面の下から突き上げられたかのように、まったく自分の動きが制御できない。

「く、痛っ」

「勇者様っ！」

「え」

アルタラの声に反応して顔を上げた、そのとき。目の前を何かが通り過ぎた。刹那。

「があっ！」

直太郎が吹き飛んだ先にいた兵士の一人に、身長ほどもある氷の柱が突き立った。

「う……」

血飛沫が、頬に飛ぶ。

無意識に手をやれば、べたりと手の平が濡れた。

「あ……あ、あああ」

それが、とどめになった。

「うあああああああああ　　っ！」

感情の堰が切れ、溢れ出す。

同時に、周囲の魔力が直太郎に呼応するかのように密度を増していく。

「こ、これが、人の魔力……？」

アルタラが、呆けたように呟いた。

魔物たちが放ってきた魔法など兎戯にも思える、圧倒的な魔力が充満していく。

「まずいですわ、魔力が暴走して……くっ、せめて方向だけでも！」

音が消えた。

全てを飲み込む光の塊が、草原に巨大な穴を穿つ。

荒れ狂う魔力は一陣の豪風となって、あらゆるものを吹き飛ばす。

そしてほんの一瞬の後、それらは唐突に消え去った。

何もなかったかのように、ただ隕石でも落ちたかのような跡を残して、さわやかな風が平原を抜ける。

「ぐ、くっ……」

アルタラは、魔力の奔流を受け流すために、全ての力を使い切って地面にひざを落とした。

さぞ高価なのだろう赤のドレスは焼け焦げたようにボロボロで、光のような金の髪も見る影もなく煤けている。

彼女の背後に並ぶ兵士たちのほとんどは、巨大な魔力に当てられて意識を失っていたが、今の一瞬による死傷者はいないようだった。代わりに、受け流された魔力の全てを受けた魔物の軍勢は、すでに壊滅状態。

「さすがは……勇者様ですわね……」

意図的ではないにしろ、勇者は彼女の望むことをやってのけた。

その事実だけで、アルタラは誇らしげに微笑んだ。

だがしかし、もう一つ、危惧すべきことがある。

「あの魔力の中に感じたのは、おそらく転移の術式……」

きつと、あの巨大な穴の中をいくら探しても、勇者は見つかるまい。

アルタラはそこに思い至ると大きく嘆息し、兵士を纏めてさっさと城に帰るごと、ゆっくり腰を上げるのだった。

一話（前書き）

ちよつと短かつたかも。

## 二話

炸裂する光の中、直太郎はどこかに逃げてしまいたいと願った。それは、本能だ。

誰だって、自分の予想や覚悟を超えた痛みや苦しみがあれば、逃げたいと思ってしまう。

そして、直太郎がそう願った結果……彼がいたのは、濃く茂る森の中だった。

「う……あ……？」

ぼんやりとした頭で、直太郎はゆっくりと目を覚ます。

起き抜けの霞がかかった視界に、緑の色が映る。

自分がなぜ寝ているのか、エンジンのかからない頭でなんとなく思い出そうとする。

そして

「　　っ！」

フラッシュバックのように、記憶が蘇る。

赤い血が、黄色の脂肪が、青の混ざる臓器が……。

恐怖の記憶に思わず目を見開き、あわてて起き上がり周囲を見ようつとした瞬間、

「あ

視界が反転した。

勢いがつきすぎたのだ。

起き上がる勢いのまま、二度三度と転がり、木の幹に頭をぶつけ

てようやく止まる。

「痛っ」

痛みに顔をしかめるも、今度は転ばないようにゆっくりと立ち上がろうとして……また二度転び、頭をぶつけた木の幹にもたれるようにしてやっとのことで立ち上がることに成功した。

「……今度は、どこだここ」

周囲を見渡す。

薄暗い、日の光もろくに届かないほど葉の生い茂った木が並ぶ、深い森のようだった。

もちろん、見覚えはない。

「どうすっかな……」

夢の中に迷い込んでしまったような出来事の連続。

もしかしたら、この頭の中にある血みどろの戦場のような記憶は本当に夢だったんじゃないかと思おうとして……考えないようにするとういのは考えるのと同義な訳で、強烈にこびりついた衝撃が、そんな安易な考えを否定した。

「はあ……」

魔物や兵士、それに王女や自分が引き起こしたかもしれない爆発……何があったのか、ぶつけた痛みが眠気を取り去ったことで完全に思い出してしまう、直太郎はため息をついた。

自分の両手の平を見てみれば、じつとりと汗をかいていた。

特に暑くもないのに、額に脂汗が浮かぶ。

足などは、木にもたれかかっている必要なければ崩れ落ちてしまいそうなほど、無様にもガクガクと震えている。

あの記憶の中にある景色は全て、元の場所にいれば生涯見ることにはなかったであろうものばかり。それは現代に生きてきた人間としての脆弱な精神など簡単に冒して、脳の奥底にどうしようもない恐怖を刻み付けてしまったらしい。

「トラウマ、ってやつか」

深呼吸を繰り返し、乱れた心拍を正常へともっていく。

幸いにして、ここの空気はとてもキレイなようだ。排ガスにまみれて腐りかけた都会の空気とは一線を画す、緑の匂いがした。

だんだんと、気分が落ち着いてくる。

そして、気分が落ち着けば、次にくるのは数多の疑問だ。

第一に、ここはどこかということ。

少なくとも、日本じゃない。

あの草原も日本ではなかったが、この森にしても、知識源はテレビだが、ここまで深い森は熱帯でもない日本にはそうあるものではないだろう。それに加え、そこらに生えている草花や木にしても、見たことがない種類ばかりだ。直太郎にしてもそれほど植物に明るいわけではないが、子供のころに見た図鑑でも、テレビのドキュメンタリーで見たジャングルにしても、こんなものは見たことがない、そういう植物ばかりだ。

さすがは我が王国に伝わる秘術。異世界からの召喚ということとでまず言葉が通ずるのかどうか、少し不安でしたが……

思い浮かぶのは、王女と名乗った少女の言葉。

異世界。

そんな馬鹿な、そう言ってしまうのは容易い。だが、事實は小説よりも奇なり、と言う言葉もある。

言うなれば、幽霊やUFOは存在するのか、という話だ。

いない、と断ずるには根拠がない。いる、と言い張るには証拠がない。だが、いないと証明すること、それは悪魔の証明だ。ならば、可能性がゼロとは誰にも言えない。異世界に召喚されることは絶対にあり得ない、そう言い切ることも、できない。

「と云っても、ここにいちや確かめもできないしな……」

例えここがどこだろうとも、幸いなのは言葉が通じそうだということか。あの王女とかいう少女だけが特殊な言語を使っているのであれば、おそらく、言葉は通じるはずだ。

ならば、まずすることは人に会うことだろう。できれば、集落のようなものでもあればなおいい。

……ところで、まだ確かめなければならぬことがもう一つある。直太郎は拳を握り、今までもたれていた木の幹に向かって振るった。もともと格闘技の「か」の字も知らない直太郎の、おそらく空手を習っている小学生にも及ばないであろう軸のぶれた正拳突きは

……

「あー……マジか……」

見事に木の幹を深く抉った。

弾けるように木片が飛び散り、薄くなった幹は上方に茂る枝葉の重みに耐え切れなくなったのか、ミシミシと軋むような音を発する。そしてそのまま、ゆっくりと他の木の枝を押しつけながら倒れていった。

そんなに細い木でもなかった。抱きついてても、ギリギリで手が回

りきるくらいだろうか。  
もう笑っしかない。

「勇者ってのは、これのことか……」

やはり、筋力そのものが強くなっているのだろうか。

あの自称王女の言うことを信じるに、魔力というのもなんだかすごいらしい。

だが、意識しなければまともに立ち上がることもできないほどに筋力が変化したというの……言わねば、重力百倍の宇宙船から降りたようなものだろうが、まったく不便極まりない。まあ、いつか慣れはするだろうが。

とにもかくにも、直太郎は木が倒れて幾分か広くなった空を見上げて太陽の位置を推測し、その方向へ歩くことにした。太陽の上がる方角が同じならば、向かうのは、東ということになるだろう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4272i/>

---

一般人未満勇者以下

2010年10月10日11時53分発行